

※テキストは、黙読する上で最小限の読点「、」にしています。

朗読する際は、自分なりの文章のリズムを意識して、読点を自由に打ち直してください。

### テキスト3

#### 『向こう岸の伝説』

「あんたもその口かい？」ふと、声の下から浮いてきた。「俺、あんたのこと知ってるよ」。

その声の主は船に乗っていた。さびの浮いた古くさい小船。浸水しない方が不思議といったような代物である。彼はその舳先から声を揺らせた。

私も彼のことを知っていた。ここでよく見かける船頭の一人だ。日に焼けた肌からは年齢が分からなかったが、どうやら思っていたよりも若いらしい。私は彼に向かって曖昧に微笑み、答えを濁した。

「あんた、何日もそうやってこの川を眺めてるだろ。俺、こう見えて記憶力はいいんだ」

「そうか。で、その口ってのどういう意味だ？」

私はそう訊ね返した。が、私はその答えを知っていた。

噂だ。この地で何度か耳にした噂のことである。

——この広大な川の向こう岸に黄金が眠っている。

私のような外の人間にとってみれば、とるに足りない「噂」に過ぎないのだが、この地の者にとってはある種の「伝説」としての色合いが濃いらしい。嘘だと疑いながらも、どこかで信じている節が見受けられる。

この船頭もその一人なのだろうか。そんなことを思いながら私はまた笑みを浮かべた。

彼はきょとんとしたような表情を寄越し、白い歯を零した。

素直な男だ——多分、伝説を信じられるほどに。

黄金か。私は小さく呟く。

確かにここにはそんな匂いが漂っている。遥か西方から流れ込んできた文化や街並みを見ると、そんな伝説の一つや二つが転がっていても不思議はない。彼らが伝説を自然と受け入れたのも分かるような気がする。だが、黄金というあたりがどうにも古くさく感じられ、まったく別の時代にやって来たような感覚に陥るのだった。

「向こう岸には本当に黄金が眠っているのかな？」

私が訊くと、彼は晴れやかに頬を緩めた。

「ほら、俺の言った通りだ。やっぱりあんたもその口だ。答えを知りたいか？ だったら俺を雇ってくれよ」

なるほど、彼らはそうやって稼いでいるのか……。

私はなんとなく想像していた。この噂、いや、この伝説を産み出したのは彼ら船頭連中ではあるまいか。自らの商売のため、そして、これからも続く日々の生活のために……。

だとすれば、向こう岸に黄金などない。そこに存在するのは彼らの真実だ。

この伝説にはきっと彼らの日々の真実が隠されている——なぜかそんな気がして仕方なかった。

私は告げた。

「君を雇おう。君の船に乗ろう」

「そうこなくちゃな」

彼はそう言って右手を差し出した。

さて、私はここで真実を見つけ出せるのだろうか。

伝説へと向かう船は黄金色に染まった大河を渡り始める。

(了)